

# 保育でたいせつなこと

——遊びを中心とする保育について——



津 守 真

いったい、保育とはどういうものかと考えるということが、保育に関するすべての技術的な論議に先立って重要である。その考え方によって、毎日の具体的な保育がこうもなり、ああもなるのである。その考え方によっては、現在やっている保育の中で不必要な部分もできてくるかもしれないし、あるいはまた全く新しい部分がいなければならないかもしれない。私どもは保育とは何かということとを、しきたりにとらわれず、常識に墮せず、公正な立場に立って考えることが必要である。そして必要とあらば、現在やっていることを変えるだけの覚悟をもって、この問題を考えねばならないと思う。現場の保育者、教師にとって問題になることは、昨年もこういうふうにやってきた、だから今年も同じようにやってしまうという習慣的な随性である。最初の第一歩をたまたまよい方向に踏みき

た人は幸運な人である。しかし途中からでもふみとどまって、いま保育者として自分の立っている地盤を反省し、自分のやっていることの意味を考えて、もう一度検討する必要がある。それは向上するためには誰にでも必要なことである。

管理の責任者や園長にとって問題になることは、社会常識や、親はこういうことを要求しているだろうという想像に立った判断である。そこでは子どもの本当に要求しているものを見落としてしまうおそれがある。また親が心の中で真実望んでいることを見逃している可能性もある。あるいは保育の実際に当たっている人が実際の子どものふれ合いの中で真剣に問題に感じていることを感じとることのできない場合もある。しかしそこで、管理の責任者は、子どもと親と保育者にとって、何が本当に必要なのかを考える立場にある

ことは明らかである。すなわち、管理者が保育とはどういうものか考えるかということは、園全体の方向をきめるほど重要である。

以上の点は親についてはどうであろうか。親は自分の子どもにも何が必要かということをもむしろ本能的に察知する能力をもっている。

自分の子どもが満足し、生きがいをもって充実した一日を幼稚園や保育園で過ごしているときには、どの親も嬉しきを感じるものであろうと思う。たとえ親の考え方は保育者のそれと合致しない場合でも、自分の子どもが楽しく一日を過ごしているというだけで不満を感じることはほとんどないだろう。幼稚園や保育園側は、いかにして幼児に満足のゆく充実した生活を与えるかということに最大の努力を払うべきであって、そのときに親の要求を推察しすぎる必要はないのである。むしろ、子どもがはりきった生活をしていることを親が理解するならば、親にも喜んでもらえるという確信をもって保育に当たってよいと思う。

それでは、子どもに充実した、生きがいのある生活を与えるためには、保育は何をしたらよいのであろうか。それは遊びを中心とした生活を子どもに保証することであると思う。以下に遊びを中心とする保育について、いくつかの問題点について述べてみたい。

### 幼児の保育の基本をなすものは遊びである

遊びは幼児の生活にとって最も大きな部分を占め、幼児の心身の発達にとって重要な意義をもっている。遊びの中で幼児は最も自由に動き、自己を発揮し、自分のもっているだけの能力を駆使する。遊びの中で幼児は友人同志お互いに知り合い、お互いに自己を発揮して協調点を見出す。幼児をじゅうぶんに遊べるようにするならば、幼児にとって必要なほとんどすべての教育的要素もそこにふくまれることになる。幼児に十分な遊びの場を与え、すべての子どもが全力を発揮して遊べるように指導をすることがすなわち保育であると言つて過言ではない。

だから、幼稚園や保育園の一日は、遊びにはじまり、遊びを中核とし、遊びに終つてよい。今日も一日遊んで終つてしまつたと言え、る保育者は良い保育者であり、幸福な保育者であると思う。また一日思う存分遊んで家に帰れる幼児は幸福であると思う。子どもが幼稚園から家に帰るとき、明日はこんなことをやろうと心に抱負をもつて、たのしい気持で歩くことができるとき、またそのような状態をつくることができるとき、先生も子どもも親も、保育の満足感をもつことができるかと思ふ。

### 保育における教育的要素について

#### 社会の指導と遊び

子どもが一日遊んでいたら、教育的要素はどこにいればよいのかとたずねる方があるかもしれない。もちろん、幼稚園や保育園での遊びと、町角の子どもの遊びとは違うところがあるのである。町角の子どもの遊びは放任された遊びである。力の強いものがいつも勝ち、弱者は敗れる。道理が通らないで力が通る。ある子どもは自分の暴力を發揮し、他の子どもは自分の能力を發揮することすらできない。けんかや紛争の解決も、力の強いものの一方的な意志に任せて、共通に従うべきルールの発見にまでいたらない。遊びにおける子ども同志の関係は、対等な協力関係でなく、強いものの支配と弱いものの従属という関係である。これらのことはすべて幼稚園の保育内容の社会で問題にすることがらである。幼稚園では子どもにじゅうぶんに遊べるようにするが、それは強者の力による支配を許しているのではない。保育者はその遊びの中で子どもの友人関係に注意を払い、あるときは教師自ら子どもの仲間として遊びに加わることによって方向を与え、あるときは子どもの遊び仲間のメンバーの構成を考えたり、子どもの中のリーダーに働きかけたりする。またあるときは子どもたちにそこで生じた問題について話し合う機会を与え、子どもたちのグループの成長をはかるのである。このような社会の指導はみな子どもの遊びの中で行なわれる。遊びは社会の教育的指導の行なわれる場である。

### 幼児の製作活動と遊び

幼児は遊びの中でもものをつくる。製作活動は遊びの重要な部分である。子どもの遊びの中には、じゅうぶんに製作の機会がある。製作の動機づけは遊びの中に自然になされていくし、また遊びの中に動機づけを用意することは容易である。つくりたいという意欲に支えられてつくるときには、子どもにとって一つのものをつくるとそれで終りになるのではなく、さらにその意欲に支えられてもっと他のものや、もっと複雑なものをつくるようになる。ここでは子どもは何をつくらせているのかの自覚をもっており、つくることの中に自分自身があり、工夫し次の段階へ移る発展性がある。そこで子どもの中に養われるものは、製作の意欲に支えられた目的の把握、目的を貫徹するまでの持続性と忍耐力、目的にかなったものをつくる工夫力、もしもそこで教師や友人の助言があれば、助言を検討し選択してとりいれる能力、それらの作業に要する技術などである。このような多様な能力は、製作活動だけをとり出して指導しようとするときには、とうてい蔽いきれないほど多様なものである。子どもの側につくる意欲も必然性もないときに、突如として全員に一律の課題を与えられるときには、教師の指示に従って一連の作業が終了すれば、それでその製作活動は終りである。そこには目的を遂行する持続性、工夫する力、助言を選択してとりいれる能力などの發揮される場はなく、子どもはつくることの中に自分自身を見出すことはできない。つくる意欲を起すことすらできないところには、それに

づく製作過程は教育的意味をもたないのである。そこでつくる意欲をもつことができなかつた子どもは、先生から注意され、叱られ、束縛感と失敗感をもつて、つくるのが嫌いになっていつてしまふであろう。本来はつくることを好むはずの幼児に、つくることを嫌いにさせるのは、多くの場合、意欲のないところにつくることの強制と批判があるときである。

遊びの中ではつくる意欲を起す機会は豊富にある。その機会をとらえてつくりたいという気持を起させるところに製作活動の指導の重要な第一歩がある。それから後はほとんど子どもに任せても相当発展するものであるが、適当な材料を与えること、教師も一しょに考えてやること、教師や他の子どもがつくる過程をみる機会をもつこと、お互い同志の批判などは子どもの製作活動を発展させる契機となる。製作活動は遊びの中で発展し、遊びに欠くことのできない要素である。遊びの中に製作活動の指導の機会を見逃すことは非教育的なことであり、能率の悪いことである。

### 音楽リズムと遊び

音楽リズムはふつうに遊びからきりはなされて、多勢で一しょに歌を歌いリズムをするものと考えられている。しかしそのように考える必要性はまったくない。幼児の遊びの生活の中に歌はついてまわるものである。子どもの遊びに関連させて歌を教え、リズムを与えるならば、子どもは音楽リズムを生活の中にとけこませて楽しむ

であろう。子どもの遊びの中に歌やリズムが加わり、歌やリズムの中に子どもの遊びが表現されるであろう。それに対して、子どもの生活に何ら必然性のないときに、何ら必然性のない歌を教えられたとしても、それは教育的意味をもたない。子どもは断片的に歌を覚えるにとどまるのであって、歌をいくつ覚えても子どもの生活にとって意味はない。子どもが歌をたのしみ、リズムを喜んで生活の中にもつてくること、また生活の中から歌やリズムを取材してゆくときにはじめて歌やリズムの教育的指導の基盤が成立するであろう。音楽リズムと子どもの遊びについて考えると、私はとくに保育技術の考え方についてはっきりと考えておく必要があると思う。子どもに教える新しい歌や曲を多く知っておくことは保育者にとって必要なことではない。子どもはそんなに多くの歌を知っている必要はない。むしろ遊びの中に音楽をたのしませることこそ必要な保育技術である。また、音楽を利用して静肅にさせたり、音楽の合図によって部屋を出入したりして音楽によって子どもを自由に動かすということは教育上必要なことではない。そんなことは保育技術ではない。私は幼稚園や保育園から、このような音楽による合図を取り除くべきだと思う。幼児の音楽のための保育技術は、いかにして子どもに音楽を楽しませ、音楽の中に自己表現させるかということに重要な課題がある。

## 生活指導について

遊びを中心とする幼児の生活の中で、基本的習慣の訓練やしつけはどのような位置づけを持つだろうか。家庭においては衣食住に伴う生活習慣（衣食住の環境に対する適応）は比較的に大きな部分を占める。しかし家庭においても幼児の生活の基調は遊びであり、生活習慣は従である。基本的習慣は本来発達の過程として環境に対する適応行動として各発達段階に応じて学習される。これは幼児の段階だけで終了するものではない。保育園でも生活習慣はかなり大きな部分を占めている。家庭で生活習慣の秩序が欠けている場合には、保育園での生活指導は重要である。しかしそれでも幼児の生活の基調は遊びであるという原理には変りはない。生活習慣訓練によって遊びが中断されることが多くなるならば、順逆顛倒であると言わねばならない。

幼稚園においては生活習慣のしつけの占める比率は比較的に小さい。登園、帰園、昼食の除いてはほとんど生活習慣を主とする場面はない。たとえば砂場で衣服を汚さないこと、水を使わないこと、というようなことが生活習慣の上から遊びの規制となるならば、そのような規制は遊びを円滑にすることを妨げることとはなっても遊びの発展に役立ちはない。むしろ生活習慣のしつけは最低にとどま

ってよい。健康のための清潔の訓練がしっかりとなされていればそれでよいと思う。しつけのための考慮があまりに多すぎると、子どもの遊びはたえず中断されて、発展が妨げられ、教育の場が成立しなくなってしまうからである。

## 集団行動の訓練

幼稚園の一日のプログラムの中で、クラス全員あるいは幼稚園全体が集まって、歌を歌ったり話をきいたり体操をしたりすることを重要視する考え方もある。しかし、そのために子どもの遊びが中断され、発展が妨げられる結果となったとしたら、どうであろうか。

子どもの遊びが発展するのには時間をかけなければならない。めいめいの子どもが自分の遊びを発見するまでの時間、遊びにとりかかってからそれが発展し、子どもがその遊びに満足を感じるようになるまでには少なくとも一時間以上は要するのである。その時間を急ぎすぎると遊びが発展する余裕がない。幼稚園や保育園の一日のプログラムではまず時間を十分にとることがもつとも教育的なことである。その遊びの中に教育的な指導の機会をいくらでも豊富にとりいれることができるのである。もしも遊びがじゅうぶんに発展するならば、一日中そのようにして過ごしてもかまわないし、それはむしろ望ましいことと言える。しかしもしもその途中で一同を呼び集

めるために遊びを中断せねばならないとするならば、そこで与えられる内容と、さらに遊びが発展するならば与えられるであろう内容を比較検討してみる必要があると思う。どちらの方が子どもは満足感と充実感を感じているか、どちらの方が子どもは豊富な能力を使用しているか、そこで行なわれることは遊びの発展に役立っているか、などはじゅうぶんに考えねばならぬことである。もしもそこで皆が一斉に指示に従って同一の行動をとることが集団のしつつけのために必要だということが理由としてあげられるならば、それは幼児の段階では重要ではないといわねばならない。幼児でも必要性を感じる時には、一斉に集まり集団行動をすることは容易にできるからである。

むしろ集団行動の訓練の必要があるのは、子どもの遊びの必然性によって集団の話し合いを必要とするような場合である。争いの生じたとき、集って相談したり共通の経験をしたりすることが遊びの発展に必要なときなどは、教師が積極的にこのような機会をつくるのがよい。

一斉に集まる機会が少ないからといって、将来集団行動がとれなくなるほどにわがまま勝手になるという論理は成り立たない。むしろ逆に、あまりにしばしば一斉集会のために遊びが中断されるならば、一斉に集まることに嫌悪と反抗を感じるであろう。それを通り返れば、十分に遊ぶことの意欲を失い、遊びに対して無感動にな

り積極性がなくなるであろう。子どもの遊びの発展に役立つかぎりにおいて、集団訓練も必要なのである。

### むすび

幼児の保育の中心は遊びである。幼稚園や保育園ではもっと子どもが遊ぶ時間をじゅうぶんにとる必要がある。与えるプログラムがあまりたてこんでは子どもは遊ぶひまがなくなる。むしろ与えるプログラムは子どもの遊びを發展させるために必要なのである。

保育者は子どもの遊びを發展させるために準備をする必要がある。歌わせるための用意やつくらせるための用意ではなくて、遊びを發展させるための音楽や、製作のことを考えておくことが重要である。

そして一日をじゅうぶんに遊んで終ることのできたときには、子どもは何かをやったという満足を感じるであろう。その遊びが、保育者のじゅうぶんな準備の上に發展したものであれば、それこそ子どもと保育者との共同の制作品である。そして保育者も子どもとともに過ごす一日に喜びと張り合いを感じるであろう。

\*

\*

\*

\*